

もちづき そつ 望月 奏さん（国立江田島青少年交流の家勤務）

2015 年度 4 次隊 青年海外協力隊

派遣国：ヨルダン 職種：青少年活動

2021 年 1 月 17 日（日）中国新聞 SELECT 掲載

※中国新聞社の許諾を得ています



難民の子の居場所提供

「帰る場所があっていいね」。
シリア難民のつぶやきが頭から離れない。青年海外協力隊の任期を終え帰国してから間もなく 4 年となる。2016 年 4 月、中東ヨルダン北部にあるシリア難民キャンプ内のユースセンターに赴任し、子供の居場所づくりに取り組んだ。

放課後や不登校の子を対象に、スポーツや工作などの活動を通じてストレスの緩和を目指した。冒頭の言葉は、言語や文化が異なる中、戸惑いやふがいなさを感じていた私に対し、親身になり活動を手伝ってくれた同僚の一言だ。

帰国間際の何げない会話だった。私は志願して難民キャンプに来たが、故郷に帰りたくても帰れない彼らを前に無力さを感じながらの帰国だった。

帰った場所は、中東と同じくオリーブが採れる江田島市。不思議な縁を感じる。現在、国立江田島青少年交流の家に勤務している。全長 9 ㍓のカッターボートに最大 24 人が乗り込み、力を合わせて広島湾をこぐ研修で知られる。

子供にさまざまな体験活動の機会を提供している。社会が急速に変化し行き先不透明な時代を、たくましく生き抜く青少年の育成が目的である。ヨルダンで培った、従来の考え方に捉われずに多角的に物事を捉えようとする経験が役立っている。いわゆる厳しさに定評のあるカッター研修であるが、時代の変遷と共に指導の在り方を見直そうとしている。単に既存の否定から始めるのではなく、共通項を明らかにし検討する過程が、異国の地で順応しながら活動した時の記憶と重なる。



難民キャンプ内のユースセンターでサッカーをする少年たち